

神社研究での地理的な見方・考え方と課題

—奉納物の時空間情報—

黒 木 貴 一

I. はじめに

日本文化の一つであり、全国に約9万社あると言われる神社は、1000年以上続く住民結束の場である。またそこは津波^{1),2),3)}や斜面災害⁴⁾に対し独特な地形条件から被災を免れやすいとされ、被災しても復旧や遷座を繰り返し、今日まで持続されてきた聖空間でもある⁵⁾。神社の立地場所の安全性に対する認識は、2011年東北地方太平洋沖地震以降に強まり研究蓄積が進む。また持続可能な開発目標（SDGs）が強く意識される現在、地域社会とともにある神社の現状や課題は、研究分野が多く網羅的に調査されても総合的な理解は難しい。ただ神社境内では、風化して文字が判読できない狛犬、火袋が欠損する灯籠など痛ましい姿の奉納物を近年見ることが多い。時には破損した奉納物が境内の片隅に放置される。このような奉納物の痛ましい姿を露呈する神社は、特に少子高齢化で限界に近付きつつあるローカルな集落に散見される。逆に都市域では、奉納物がほとんど失われ、社叢林が伐採撤去され境内に社殿しかない状況も生まれている。

神社は伊能図や地形図に200年以上続く地図記号をもつ日本の代表的な空間である。また狛犬等の定型の奉納物以外に、参拝とは関係の薄い人物の顕彰、催事の感謝、地域の信仰を示す奉納物も多く集まり、一種の文化空間ともなっている。このようなミレニアム規模の文化財を包括する神社は、一見健全に見えるながらも、穏やかな社会構造の変化の末に地域社会での消滅が近づいているように思われ、また突発的な自然災害により瞬時に消滅する脆弱性も増した。

そこで本研究では、多数ある神社に関する研究を地理的に俯瞰することを目的とする。次に神社奉納物を対象とするデータ収集から見えた、神社の現状や課題を示し、その研究意義を考察する。

Ⅱ. 研究方法

神社に関する研究群に関し、地理的な見方・考え方に基づいて、扱う対象と空間を整理する。

大阪平野西部で、武庫川下流の主に右岸の武庫川地区⁶⁾と、淀川下流の主に右岸の淀川地区を対象とした神社の奉納物に関する調査から、様々な地理情報を保有する神社の価値を顕在化する。ここでは奉納物数の歴史的な変化傾向と、奉納物の奉納年や種類別の分布特徴を確認する。武庫川地区は39社766奉納物、淀川地区は42社1280奉納物を調査した(図1)。図1には1995年兵庫県南部地震で現れた震災の帯⁷⁾を示した。

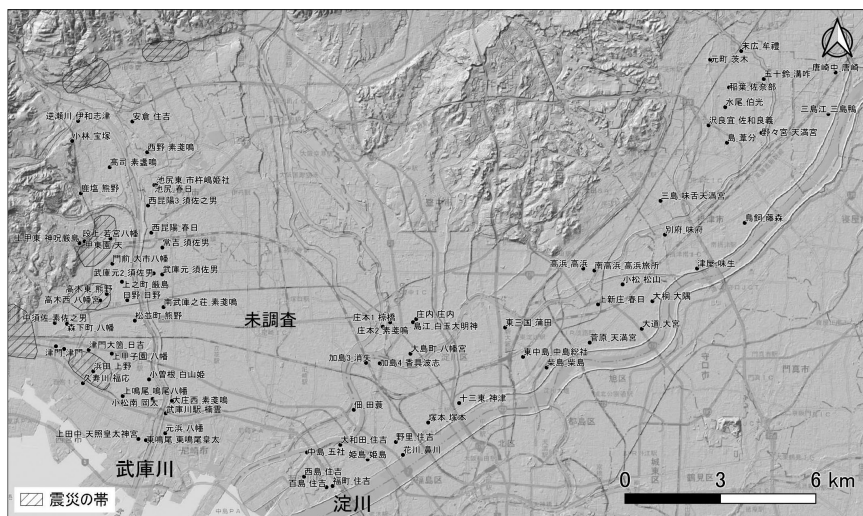


図1 調査した神社の分布と名称

神社名称，地域，奉納年，奉納物の種類，奉納理由などの調査結果は，Excel にデータベースとして整理する。また神社位置の shape ファイルにそのデータベースを結合する。

Ⅲ．神社研究に見られる地理空間の捉え方

神社は古くから建築学，民俗学，歴史学，地理学など様々な分野で研究対象とされてきた。各研究は，分野独自の課題と手法を持ちながらも，神社境内と神社群に注目する。地理的に見れば，この注目は，参拝対象となる神社境内の「内包する空間」と，その範囲の外で神社群を取り込む「外延の空間」に向けられている。前者は，それを構成する社殿，社叢林，境内の広場などの微空間に着目するし，後者は，内包する空間や微空間を点と見なし，外延の空間での分布特徴に着目する研究である。

1．内包する空間に向けられた研究

社殿に関しては，建築様式に関する検討が進んでいる。神社は本来，山や湖沼など自然物に営まれる物であり，その社はなかったが，6世紀に伝来した寺院建築に影響されて成立したと考えられている⁸⁾。当初は臨時の施設の神籬であり，それが社の建築として恒久化したと考えられており，その後，時代背景に合わせて変化するその様式に関する研究が多い^{9), 10), 11)}。

社叢林に関しては，自然に人が関与して維持される里山¹²⁾や里湖¹³⁾景観の研究が進んだほぼ同時期に，その関心が高まった。社叢林に関し，気候と地形条件から岡山県の現在の植生が説明され¹⁴⁾，古地図，地形，歴史災害から都市内の植生遷移が追跡される¹⁵⁾など，地理条件でその景観は多様に変化することが示されている。さらに，古い絵図や写真資料からみると，社叢林は人の関与によって針葉樹から常緑広葉樹へと歴史的に景観を変えており¹⁶⁾，社叢林管理のための住民組織の現状から，その景観維持には時代に合わせた地域の関与が必要とされる¹⁷⁾。

境内の広場に関してはその土地利用に着目される。和根（2016）¹⁸⁾ は上田城跡に神社と公園が設置された明治以降の利用経緯を報告し、小林（2017）¹⁹⁾ は明治以降の神社境内の景観の特徴と変遷について社会背景を折り込みつつ論じた。また都市オープンスペース²⁰⁾、子育て支援²¹⁾、ちびっ子広場²²⁾など、都市化や少子高齢化への対応を境内利用で考える研究も見られる。さらに大阪市の神社を対象に、その分布と境内の形態を分析し、接道率や面積の観点から避難空間として活用可能性を議論した井上ほか（2009）²³⁾ や、神社を避難所とするハザードマップ作成を行うことを通じて、外延の空間にある居住者の防災コミュニティ形成を試みた高田ほか（2020）²⁴⁾ など、多頻度化する自然災害に対応した土地利用の論考も増えている。実際、調査でも、児童公園、ゴミ集積所、運動場の利用の他にも、防災倉庫の設置、幼稚園や高齢者施設の隣接等、現代の社会情勢に合わせた利用を確認した。

内包する空間の極微空間に相当する神社の構成物として、主に石材による奉納物がある。奉納物は多種多様だが、代表的な鳥居と狛犬に関して研究成果を類型化して紹介するものが多い。鳥居に関しては、形態型、構造、信仰、成立の歴史など網羅的に紹介される^{25), 26), 27)}。一方、狛犬に関しては、類型を明らかにし、歴史や形態を踏まえた地域分布までが一部論考されている^{28), 29), 30)}。小寺（2003）²⁹⁾ は、大阪府全域で1255対もの狛犬を調査し、狛犬を分類し分布を確認し、狛犬で見る文化圏の存在を示した意義は大きいですが、そのような分布を追究する研究姿勢は珍しい。また全国対象となれば、調査には150年を計算上要するため、単独調査による全体把握は難しいと述べている。つまり分類の後に時代変化、人の関与、土地利用へと研究展開された社殿、社叢林、境内に対し、奉納物のそれはまだ分類の段階にあると考えられる。

2. 外延の空間に向けられた研究

地理学では、神社範囲を点と捉えつつ、外延の空間で分布を議論する研究が近年続いている。それらは主に神社の信仰圏や鎮座思想の検討にある。

内包する空間の神社が外延の空間で支えられていることに基づき、信仰圏の検討が進んだ。その嚆矢は岩鼻（1983）³¹⁾ の出羽三山信仰圏の研究であり、信仰の主体や風習の違いに基づく、それが第一次から第三次に同心円状に広がる構造があることが推定された。その信仰圏の全体規模は半径約300 km に及び、特に遠方の三次信仰圏では、大山、富士など他信仰との競合までであることを明らかにした。その後、笠間稲荷神社の信仰圏の同心円及びセクター構造を捉え、それぞれの信仰特徴を論じた研究³²⁾や、岩木山信仰圏の同心円構造を示し、遠隔地での信仰衰退の過程を明らかにした研究³³⁾などがなされた。そして小野寺（2005）³⁴⁾ では、信仰圏の形状を明らかにする過程で、注目が薄かった講組織に着目し、伊勢参宮を例にその歴史的な変遷を追跡した。

また神社の配置には何らかの意図、つまり鎮座思想があり、それが方位性に見出されることが多く報告されている。氷川神社では、その配置の直線性が冬至や夏至の太陽の出没方向との関連³⁵⁾が、藤原京の施設設置では、天体観測に基づく南北軸と東西軸線の方位の考慮³⁶⁾が示された。また、神社に止まらず古墳、都、城の相対的な位置関係が方位に関連付けられること³⁷⁾も示された。

そして、2011年東北地方太平洋沖地震以降、神社が被災を免れた点をとらえ、神社の安全に関し外延の空間に、立地地形の共通性を求める検討が急速に進んだことは先述の通りである。また社叢林に関する研究^{14), 15)}では内包する空間に着目しつつも、周囲の環境との連動や分布に関して論じ、土地利用に関する研究²⁴⁾では、内包する空間に着目しつつも、その周囲に関しても論じており、視点は外延の空間へ向けられている。しかし奉納物の研究は、先述のように外延の空間への展開にまだ至っていない。

Ⅳ. 神社奉納物への地理的な見方・考え方の整理

1. 地物の地図表記上の課題

神社の研究で扱われる対象の中、奉納物に対し類型化以上の関心の深まりが

少ない背景を地理情報の在り方から考察する。まず研究対象が占める空間と地形図の地図記号を対応付けた（図2）。神社の内包する空間には、微空間の社叢林、社殿等と極微空間の奉納物が含まれる。内包する空間に対して神社記号が付与される。また微空間の社叢林が針葉樹や広葉樹として、社殿が建物として記号が付与される。一方、奉納物は小規模な極微空間のため地図記号は付与されない。ところがこの極微空間と同スケールの地物に、記念碑や自然災害伝承碑があるが、内包する空間外にあるそれらには地図記号が付与された。特に後者に対しては、防災上の価値が認められ、斜面崩壊³⁸⁾、津波^{39),40),41)}、地理総合での活用⁴²⁾などに関し、研究が進められている。また自然災害伝承碑は、内包する空間は持たないが、その立地する地形条件の検討は、外延の空間で行われる。

したがって、神社奉納物の研究が薄い背景は、神社に関わる対象の地図表示の空間スケールが微空間までで、極微空間の奉納物は地図掲載がないことにある。これは自然災害伝承碑が地図に掲載され、防災の観点で空間的な見方・考え方に基づく研究が進むことと対照的である。

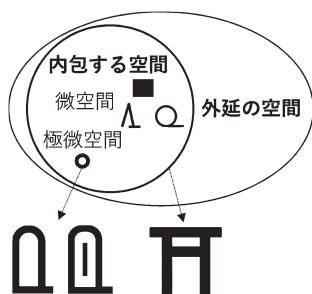


図2 地図記号と神社の空間

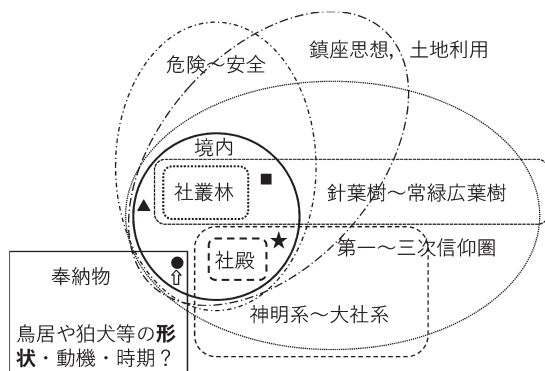


図3 各研究の空間の捉え方

2. 既存研究から見る奉納物の研究活用

神社に注目する研究を、地理的な見方・考え方で整理し、まだ注目が及ばない神社の捉え方を考察する。図3はここまでの議論を踏まえ、各研究の持つ空間の捉え方を整理した。

神社空間を、神社境内を内包する空間、第一次信仰圏から第三次信仰圏は外延の空間と表示した。この前提で各研究を見れば、内包する空間で社叢林や社殿の研究が進み、対する外延の空間では、針葉樹林や広葉樹林などの植生、神明系や大社系などの建築構造に関する分布が議論される。外延の空間でなされる研究はその他、鎮座思想、土地利用変化、自然災害に対する安全性の検討が当たる。一方、極微空間の奉納物に対しては、鳥居、狛犬、猿田彦神⁴³⁾、戎⁴⁴⁾など個々に形状に注目する研究は進んだが、その外延の空間への展開がほとんどない。

つまり神社に散在する奉納物を空間構成要素として扱い、外延の空間までを議論する試みは府和（2020）⁴⁵⁾を除けばまだなく、そのような神社研究はまだ十分成熟していないと思われる。また経年変化で見る奉納の動機や契機に関する検討は全くない。その原因には、神社境内に分散する奉納物の種類と数ともに多く、動機や契機が様々で、内包する空間では特徴を捉えにくいこと、神社間で距離があり外延の空間で俯瞰するための調査数の確保には十分な時間がないことが考えられる。また奉納物は、自然災害伝承碑等の外延の空間にある石碑と比べ、その碑文が少ないことも背景にあらう。結果、空間的取り扱い方法が確立されず、外延の空間を議論する神社研究にまで至らなかったと考えられる。

このように神社研究では、極微空間の奉納物の、経年変化から見る奉納の動機や契機の検討と、外延の空間へのその空間拡大の試みが少ない。このため神社には、自然災害伝承碑と似る奉納物に、まだ知られていない地理歴史的な価値が潜在する可能性がある。

V. 神社奉納物が持つ災害他情報の分布検証

大阪平野西部にあり東西に約10 km 離れる武庫川地区と淀川地区を対照しつつ、極微空間の奉納物が、奉納数の特徴的な経年変化を持つこと、また外延の空間を構成することを示し、それが持つ地理情報の有用性を確認する。

1. 奉納数の経年変化

武庫川と淀川の2地区で奉納物数の経年変化に見える同時性について考える。図4は、1611年から2019年まで2年集計の奉納物数を人口ピラミッド状に示す。数は、風化等での破損・廃棄により時間を遡るほど減少する。しかし2地区とも単調な減少を示さず、奉納数の多い数十年幅の時期A～Dを示しつつ、全体的には減少する。

時期Aは、1780年代の天明から1820年代の文明までの期間である。時期Bは、1830年代の天保から1860年代の慶応までの期間である。両期間で奉納数が多い背景は、奉納物に刻まれた文字が少なく不明で、別途検討が必要である。時期Cは、1890年代の明治中期から1945年第二次世界大戦の終戦の昭和初期までの期間である。1868年明治維新直後は、比較的少ない奉納数が続く。また奉納の多い時期は長続きしない。しかし時期Cの1890年頃から奉納数が次第に増加し1940年頃に極値に達し、そして第二次世界大戦の終戦とともに奉納は途絶えた。奉納物に刻まれた文字には、日露、日支、従軍、戦没、慰霊、忠魂、太平洋、大東亜、紀元、皇紀、御大典、皇太子が見られるため、その奉納の目的は国威発揚と考えられる。時期Dは、終戦後一時途絶えた奉納が再開される1950年代の昭和中期から平成までの期間である。時期Dでは、奉納物数は次第に増し、武庫川地区は1980年頃、淀川地区は1990年頃に極値を迎え、その後減少に転じて現在に至る。奉納物に刻まれた文字に、処分、再建、移転、解隊があり、境内の売却や移転、住民組織の変貌があり、その奉納目的は都市化進展への対応と考えられる。

神社研究での地理的な見方・考え方と課題
 ―奉納物の時空間情報―（黒木）

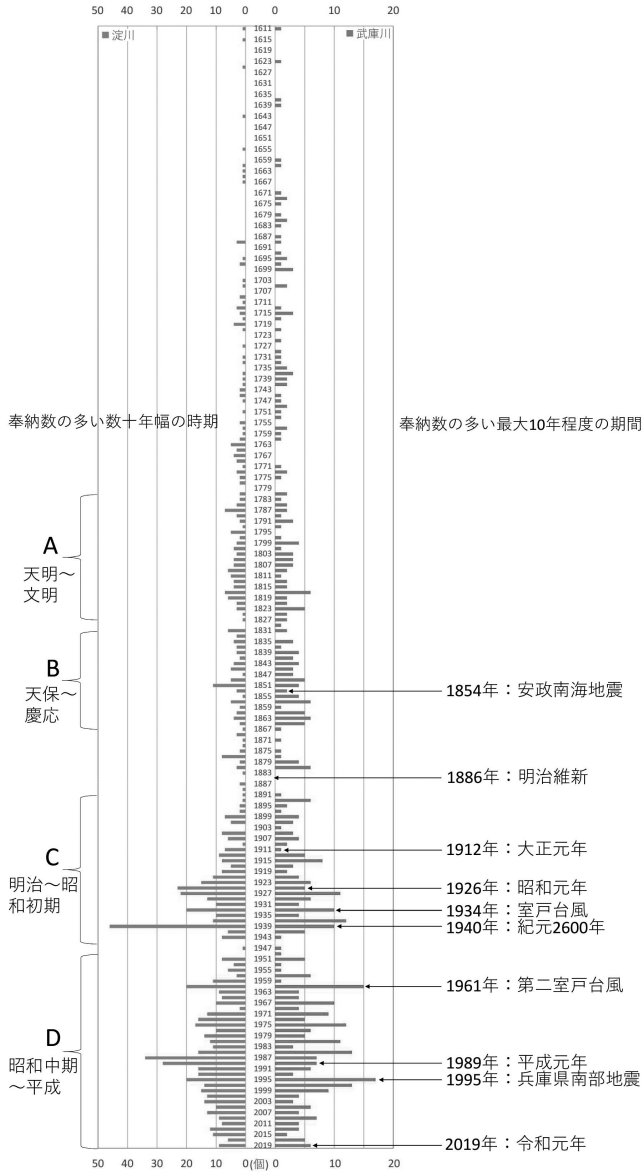


図4 2年集計の奉納物数

また全体を通じて、奉納数の多い最大10年程度の期間が多く識別される。これは両地区で共通に現れるものと単独で現れる場合がある。ここでは黒木(2022a)⁵⁾で示した奉納の契機となる自然災害や時代区切りを中心に、その期間と歴史との対応を確認する。

1886年明治維新では、両地区とも奉納物数は極めて少なく、当時の国内の政情混乱に神社が巻き込まれたことを示している。1912年大正元年、1926年昭和元年、1989年平成元年では、その後数年、当該期間が明瞭に現れた。この期間の奉納物には、御大典の文字が刻まれることが多い。ただ2019年に含まれる令和元年は、両地区とも大正、昭和、平成に対し奉納物数は相当少ない。象徴天皇制と神社との関連が弱まったことを示している。また1940年紀元2600年は、両地区ともに当該期間がよく現れた。その奉納物数は、改元に伴う増加量を超え、後述の1995年兵庫県南部地震に匹敵する規模だったことがグラフから読み取れる。1854年安政南海地震では、武庫川地区に当該期間が現れた。1934年室戸台風と1961年第二室戸台風では、両地区ともに当該期間は現れたが、奉納物数の増加はその年に限られる。そして1995年兵庫県南部地震では、2地区に当該期間が現れるとともに、特に、震源に近い武庫川地区ではその期間が長期間続いた。

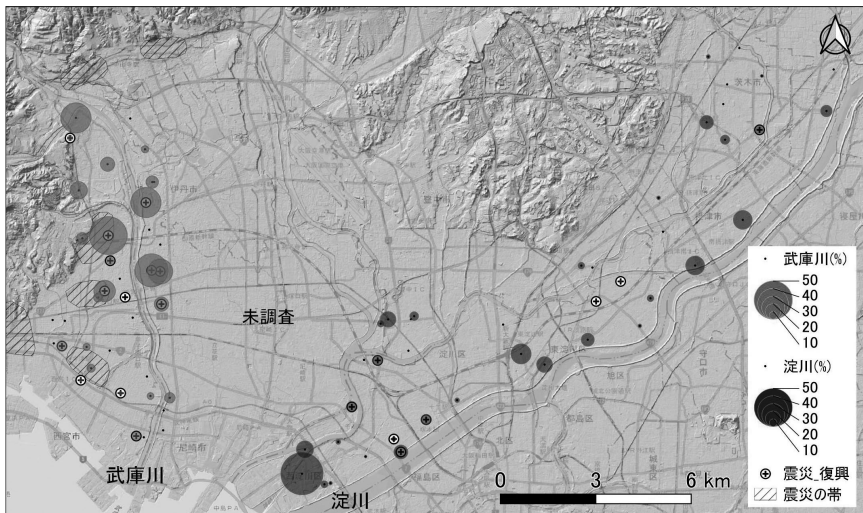
このように、奉納数の経年変化は、奉納数の多い数十年幅の時期と最大10年程度の期間で構成されている。前者は少なくとも国威発揚と都市化の社会状況が動機にあり、後者は時代区切りと自然災害が契機になっている。

2. 分布での確認

極微空間に当たる奉納物が、外延の空間にどう展開できるかを、契機の自然災害を例に示す。図5は、1995年から2009年までの15年間の奉納物数が、その神社の奉納物全体に占める割合を、円の直径で示した。武庫川地区では、その東端で北東、東、南東に3分岐する震災の帯に、その割合の高い神社がよく一致するため⁶⁾、実際⁷⁾に合う被災範囲を推定できた。そして未調査範囲を挟み

淀川地区では、東、南東の帯の延長方向に、その割合の高い神社があるように見える。ただ震災の帯に重なる神社では、震災・復興の文字が刻まれる奉納物を多く確認できるが、淀川地区では必ずしもそうではない。この原因は、1995年兵庫県南部地震に対応する、奉納数の多い最大10年程度の期間が、武庫川地区に比べ淀川地区では奉納数が少なく鮮明ではない（図4）ことにある。つまり震源から遠いと、復興は早まるか不要となり、他の奉納動機も加わって、奉納物による被災の地理情報抽出が難しくなることを示す。

奉納動機による奉納物の分布を、撫牛と遥拝所で例示する（図6）。撫牛は、祀られた菅原道真の生没や仏教との関りがあるとされ⁴⁶⁾、天満宮の名称を持つ神社によく見られるが、天満宮以外の名称を持つ神社にも多い（図1と図6）。武庫川地区では西に、淀川地区では北東部に偏在する。淀川地区の撫牛は1846年から1926年までに過半が奉納され、次の奉納は約70年後の1998年と2004年となる。武庫川地区の撫牛は1985年が確認された以外に奉納年の記載はない。撫



牛の奉納開始は、図4の時期B中程にある。これは時期Bに奉納数が増す理由を追究する糸口になると思われる。

遥拝所は、伊勢神宮を対象とするものが大半で、一部出雲、妙見山を対象とするものが見られる。武庫川地区では中部に、淀川地区では南西部に偏在する。そして遥拝所は撫牛の分布とあまり重ならない（図6）。淀川地区の遥拝所は1915年から1943年までに過半が奉納され、次が1979年の奉納となる。武庫川地区の遥拝所は1915年と1928年にあったが、ほかは奉納年の記載がない。その奉納年の集中から、遥拝所は国威発揚での奉納の一形態だったと考えられる。遥拝所と撫牛の奉納開始時期には約70年の差があり、そして双方の分布があまり重ならないことは、双方の奉納に至る地域事情を追究する糸口になると思われる。

このように奉納物の地理情報を外延の空間で展開した結果、自然災害に関しては、復旧に時間を要した著しい被災範囲を推定できることが分かった。また

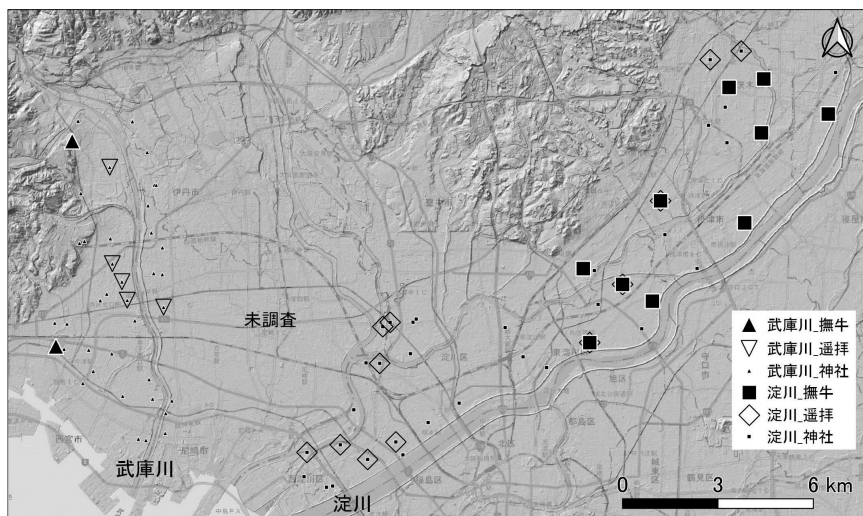


図6 撫牛と遥拝所の偏在

自然災害以外の結果では、社会状況や地域事情を追究する糸口になることも分かった。

Ⅵ. まとめ

神社に関する研究を地理的に俯瞰し、神社奉納物から得た地理情報を地図化し議論した結果、以下のことが分かった。

- 1) 奉納物を対象とする神社研究は、時代変化、人の関与、土地利用への展開がまだない分類の段階にあり、また外延の空間への展開に至っていない。
- 2) 奉納物の研究が遅れている理由として、神社に関し地図表示される空間が研究される反面、極微空間に当たる神社奉納物が地図に掲載されなかったことが考えられる。
- 3) 極微空間の奉納物に関し、経年変化で奉納の動機や契機を識別し、その外延の空間への広がりを検討する研究が少ない。このため神社には、まだ知られていない地理歴史的な価値が潜在する可能性がある。
- 4) 奉納数の経年変化から、奉納数の多い数十年幅の時期と最大10年程度の期間を判別できる。前者は動機となる国威発揚や都市化の社会状況が背景にあり、後者は契機となる時代区切りと自然災害が背景にある。
- 5) 奉納物の地理情報を外延の空間で展開した所、自然災害に関しては、復旧に時間を要した著しい被災範囲を推定できること、またその結果は、社会状況や地域事情を追究する糸口になることが分かった。

謝 辞

日本社会の構造変化と頻発する自然災害で、著しい変化や変質を示す神社を見た時、神社に潜在する地理情報を適切に記録し、日本文化を後世に伝える必要性を高めたい思いから、今回の拙稿をまとめた。この間に実施した関西学院大学の本本先生、福岡教育大学の杉村先生、志學館大学の宗先生との議論は執筆に役立った。神社に関する研究は、既に多くの先達により進められており、

神社をテーマとした調査経験の浅い筆者が、論考を行う無謀さは理解しています。内容不足や誤解など至らない点も多いかと思いますが、どうぞ皆様のご批判やコメントなど賜れば幸いです。

文 献

- 1) 宇多高明・三波俊郎・星上幸良・酒井和也 2012. 2011年大津波の災害と被災を免れた神社. 土木学会論文集 B3, 68(2) : I_43-I_48.
- 2) 高田知紀・梅津喜美夫・桑子敏雄 2012. 東日本大震災の津波被害における神社の祭神とその空間的配置に関する研究. 土木学会論文集 F6, 68(2) : I_167-I_174.
- 3) 遠藤賢也・マゼレオ みほ 2015. 宮城県南三陸町における神社の立地特性の把握とその歴史的背景に関する考察. ランドスケープ研究, 78(5) : 693-696.
- 4) 黒木貴一・品川俊介 2018. 2017年九州北部豪雨で災害を免れた神社の地形条件. 2018年秋季学術大会日本地理学会発表要旨集, 94 : p88.
- 5) 黒木貴一 2022a. 神社群に記録された地域環境の基礎データ活用と可能性. 月刊地球, 号外71 : 32-41.
- 6) 黒木貴一 2022b. 武庫川下流域の神社奉納物と1995年兵庫県南部地震. 関西大学博物館紀要, 28 : 1-11.
- 7) 嶋本俊彦 1995. “震災の帯” の不思議. 科学, 65(4) : 195-198.
- 8) 青木義脩・松原誠司 2001. 『神社建築』山川出版社.
- 9) 林野全孝・桜井敏雄 1974. 『神社の建築』河原書店.
- 10) 福山敏男 1984. 『神社建築の研究』中央公論美術出版.
- 11) 山田岳晴 2018. 『神をまつる神社建築：玉殿の起源と発展』弘文堂.
- 12) 武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史 2001. 『里山の環境学』東京大学出版会.
- 13) 平塚純一・山室真澄・石飛 裕 2006. 『里湖（さとうみ）モク採り物語—50年前の水面下の世界』生物研究社.
- 14) 位田真弓・波田善夫 2006. 岡山県中南部の社叢林植生—特に岡山県内におけるシイノキ属の生態的特性と分布傾向—. Naturalistae, 10 : 35-45.
- 15) 瀬戸口浩彰 2019. 賀茂の流れと社叢林の植物学. 総人・人環フォーラム, 37 : 6-10.
- 16) 小棕純一 2008. 古写真と絵図類の考察からみた鎮守の杜の歴史. 国立歴史民俗博物館研究報告, 148 : 379-412.
- 17) 稲垣 修・松本康夫・三宅康成 2004. 多面的機能を継承する社叢林の保全管理の課題. 農業土木学会誌, 72(8) : 689-692.
- 18) 和根崎剛 2016. 史跡上田城跡整備事業の現状と課題 —真田神社社務所新築と市民会館廃止の事例から—. 平成28年度 遺跡整備・活用研究会報告書 : 177-184.

神社研究での地理的な見方・考え方と課題
—奉納物の時空間情報—（黒木）

- 19) 小林 章 2017. 近代の神社境内の研究動向. 東京農業大学農学集報, 61(4) : 126-136.
- 20) 石井雄晋・後藤春彦・佐久間康富・上原佑貴 2004. 都市オープンスペースとしての境内の利用に関する研究—新宿・花園神社を事例として—. 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-1 : 905-906.
- 21) 藤本頼生 2009. 子育て支援と境内地の活用：神道的福祉の実現の場としての神社の可能性. 國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要, 1 : 113-128.
- 22) 諸喜田実希・武田美恵 2017. 神社境内を利用したちびっ子広場における子どもの遊び行動に関する研究, 一宮市千秋町佐野地区八幡社境内の佐野南ちびっ子広場を対象として. 日本建築学会東海支部研究報告集, 55 : 569-572.
- 23) 井上僚平・武田史朗・及川清昭 2009. 大阪市における寺社境内の分布特性・形態的特性と避難空間としての寄与に関する研究. 歴史都市防災論文集, 3 : 223-228.
- 24) 高田知紀・藪内佳順・佐藤祐太 2020. 神社空間を核とした防災コミュニティの形成プロセスに関する一考察. 土木学会論文集 F6, 76(2) : I_165-I_174.
- 25) 根岸栄隆 1943. 『鳥居の研究』厚生閣.
- 26) 津村 勇 1943. 『鳥居考』内外出版印刷.
- 27) 谷田博幸 2014. 『鳥居』河出書房新社.
- 28) ねずてつや 1994. 『狛犬学事始』ナカニシヤ出版.
- 29) 小寺慶昭 2003. 『大阪（なにわ）狛犬の謎』ナカニシヤ出版.
- 30) 上杉千郷 2008. 『日本全国獅子・狛犬ものがたり』戎光祥出版.
- 31) 岩鼻通明 1983. 出羽三山信仰圏の地理学的考察. 史林, 66(5) : 681-726.
- 32) 松井圭介 1995. 信仰者の分布パターンからみた笠間稲荷信仰圏の地域区分. 地理学評論, 68(6) : 345-366.
- 33) 金子直樹 2016. 岩木山信仰の伝播について—主に信仰圏の背景と北海道への展開を中心に—. E-journal GEO, 11(1) : 244-264.
- 34) 小野寺淳 2005. 伊勢参宮における講組織の変容—明石市東二見を事例に—. 歴史地理学, 47(1) : 4-19.
- 35) 木本雅康 1992. 永川神社の方位と信仰. 国学院雑誌, 93(8) : 23-35.
- 36) 木庭元晴 2019. 飛鳥藤原京に隠された天香具山軸と大和三山太極の都市2軸モデル. 2019年人文地理学会大会研究発表要旨 : 10-13.
- 37) 川本博之 2010. 三都（藤原京, 平城京, 平安京）と三天下城（安土城, 大阪城, 江戸城）. 日本地理学会発表要旨集, 78 : p167.
- 38) 小山耕平・熊原康博・藤本理志 2017. 広島県内の洪水・土砂災害に関する石碑の特徴と防災上の意義. 地理科学, 72(1) : 1-18.
- 39) 斎藤 平 2003. 津波記念碑の類型と分布—三陸地方を中心として—. 皇学館大学文学部紀要, 42 : 108-125.

- 40) 斎藤 平 2008. 津波記念碑の伝承. 皇学館大学文学部紀要, 46: 78-91.
- 41) 井若和久・上月康則・山中亮一・田邊 晋・村上仁士 2011. 徳島県における地震・津波碑の価値と活用について. 土木学会論文集, 67: 1261-1265.
- 42) 大平明夫 2019. 宮崎県における自然災害に関連する石碑の特徴と防災上の意義—GISを利用した防災教材の一例: 自然災害石碑マップ—. 宮崎大学教育学部紀要, 92: 58-78.
- 43) 飯田道夫 1998. 『サルタヒコ考—猿田彦信仰の展開—』臨川書店.
- 44) 吉井貞俊 1989. 『えびす信仰とその風土』国書刊行会.
- 45) 府和正一郎 2020. 能登地方における主要神社の野外寄進物. 日本地理学会発表要旨集, 97: 271p.
- 46) 島田弘巳 2013. 『なぜ八幡神社が日本でいちばん多いのか』幻冬舎.